

# 素顔拝見

## 組織再建口腔外科学分野

### 竹内涼子

皆さん、こんにちは。組織再建口腔外科学分野の竹内涼子です。普段の行動範囲が歯学部A棟と病院を中心としているため、歯学部建物のメインエリアを利用する機会が多くありません。「素顔拝見」とのことですので、今回は素顔の要素を多めに、改めて自己紹介をさせていただきます。

出身は新潟県糸魚川市で、日本海に面した海沿いの町で育ちました。糸魚川は、日本列島を東西に分けるフォッサマグナや、国石である翡翠（ヒスイ）の産地として知られており、地質や鉱物に興味のある方には密かに人気のある地域です。豊かな自然に加え温泉も多く、帰省するたびに心身ともにリフレッシュできる大切な場所となっています。

趣味は舞台鑑賞とワインです。舞台鑑賞では、宝塚歌劇、劇団四季、東宝などのお芝居やミュージカルを中心に、全国各地へ観劇に足を運んでいます。同じ作品でも、演者や演出、劇場によって印象が大きく変わるところが面白く、生の舞台ならではの臨場感や一回性を楽しんでいます。観劇にはオペラグラスは必需品で、舞台の隅々にまで



ピノ・ノワールの畑とワイン 余市にて

こだわった演技や演出を発見すると、思わず嬉しくなります。

ワインについては、2024年に日本ソムリエ協会認定ワインエキスパートの資格を取得し、現在は日本ワインを中心に、実際に現地へ赴いて土壌や気候、醸造について学びを深めています。日本全国に約500か所あるワイナリーやヴィンヤードのうち、これまでに97か所を実際に訪問してきました。作り手の方々と直接お話し、ブドウ畑の空気を感じ、土地や品種の個性、醸造技術の違いを知ることによって、ワイン作りの奥深さをより強く感じるようになりました。世界的な銘醸地のワインはもちろん魅力的ですが、日本ならではの風土で生み出されるワインにも大きな可能性を感じています。また、一つひとつの細かな条件の違いでぶどうの出来やワインの仕上がりが大きく変わる点は、手術手技の各ステップや実験のプロトコールにどこか似ているところがあるように感じます。仕事でも趣味でも、「なぜそうなるのか」という疑問に対し、そこに至る細部の積み重ねを紐解きたくてしまう性分なのかなと思います。

今後も口腔外科の知識と技術の向上に努めるとともに、自身の興味や学びを大切にしながら、日々の診療および研究に真摯に取り組んでまいりたいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願いたします。



## 小児歯科・障がい者歯科診療室

### 五月女 哲也

こんにちは、小児歯科・障がい者歯科診療室の五月女哲也です。この度、貴重な機会をいただきましたのでこの場をお借りして自己紹介をいたします。

歯学部ニュース、特にこの素顔拝見は学生の頃から楽しみに読んでおりました。学生時代の自分

たちからすると教員の先生方は日常を想像できない謎の存在でしたので、人間らしさを伺い知れる数少ない機会でした。あれから自分も教員になり、今では学生から「先生がお子さんとトイザラスにいるのを見ました」と報告してもらえるようになりましたが、子どもどころか結婚もしていません。今では自分も謎の存在のようです。

1990年10月11日生まれ、栃木県宇都宮市出身です。歌手の秦基博と誕生日が同じで、顔が似ているといわれます。余談ですが、母は自分と顔が似ているという理由で彼のファンになり、今では自分を置いて全国各地を飛び回っています。性格は気さくです。丈夫が取り柄で、中学高校と無遅刻無欠席の皆勤賞でした。インフルエンザにかかったことがないのが自慢です。地元の宇都宮は非常になにもないところで、のんきな日々を過ごしました。けっこういいところですよ。趣味はサウナ、植物、音楽、犬、お香、甘いもの等々たくさんありますが、今最も力を入れているのは爬虫類飼育です。現在カメレオンを6匹飼っており、目下の目標は繁殖です。2009年入学の本学45期生で、新潟での暮らしはもう15年以上になります。大学時代はほぼ笑っており、笑っていない時は寝ていました。素敵な友人や先輩後輩に恵まれたことは今思い返しても本当に宝物です。部活は袴姿がかっこいいというだけで弓道部に入部したものの、同期は口腔生命福祉学科の子と2人きりで、最終的には主将をやることになり大変つらい思いをしました。不勉強がたり国家試験浪人をしっかりとした後になんとか歯科医師になり、当院Aコースで研修をさせていただき本学小児歯科学分野の大学院を経て令和5年9月1日に当院小児歯科・障がい者歯科診療室の助教を拝命し、現在に至ります。

小児歯科・障がい者歯科という分野は、患者が自身の意思で来院しない、という点に特徴があるように思っています。来たくもないのに連れてこられるわけですから、我々歯科医師は敵で、嫌なことをする存在です。協力する気にもならないでしょう。そのような患者さんたちとコミュニケーションをとり、数多の方法で近づき、信頼関係を構築できたときに得も言われぬ達成感を感じま

す。お子さんたちにとって我々は往々にして初めての歯科医師です。幼いころの記憶は消えませんが、良くも悪くも生涯にわたる歯科の印象を決定づけることになるでしょう。その責任とやりがいを感じながら、日々患者さんと接しています。

これからも患者さんひとりひとりとまっすぐ向き合っ、歯医者もまあ悪くはないなと思っていただけ汗をかいてまいります。今後ともどうぞよろしく願いいたします。



## 摂食嚥下リハビリテーション学分野

筒井雄平

令和7年6月1日付で摂食嚥下リハビリテーション学分野の助教を拝命しました、筒井雄平と申します。素顔拝見の執筆の機会を頂きましたので、この場をお借りして自己紹介させていただきます。

実家は東京都小平市にあります。ブルーベリー栽培発祥の地とされ、かつて多摩川から江戸への上水道として使用された玉川上水を有する緑豊かな地域です。高校は近隣の都立国立（くにたち）高校を卒業しました。文武両道を掲げ、真に両立した優秀な同級生たちは誇りですが、私は中学生から続けたバレーボールに没頭していました。朝練の後にお弁当を食べ（朝弁）、昼休みに昼練、放課後も練習に明け暮れた日々が懐かしいです。悲願の東京都ベスト16を勝ち取った矢先に、震災があり、夢の関東大会への道が途絶えてしまいました。その後、浪人を経て本学歯学部に入學するわけですが、排球魂（漫画ハイキューは未読）が抜けない私は、当時先輩方が作られた部活のホームページを見つけ連絡を取り、入学前から練習に参加、新入生歓迎会では同級生を勧誘していました。さらに大学で6年続けたバレーボールは私の人生の一部であり、この競技との出会いが最初の転機であったと思います。

二回目の転機は、以前「大学院へ行こう」でも書きましたが、学部4年時の摂食嚥下リハビリテーション学との出会いです。摂食嚥下障害の存

在に驚き、人の生死に歯科として関わる可能性を感じて以来、当分野へ入局、臨床および研究への興味関心、やりがいは年々増えています。有難いことに大学の急性期病棟のみならず、市内の居宅や、長岡市の山間部の施設往診を経験し、摂食嚥下リハという形で歯科を必要とくださる方が増えていることを実感し、身が引き締まる思いです。

学位研究では、開口にも嚥下にも働くと考えながら、中枢制御機構や機能的な役割が明確ではない舌骨上筋群に着目し、動物実験を行っていました。神経科学と出会い、摂食嚥下運動のメカニズム解明に興味を持ち、国際学会にて、言葉は違えど、同じ関心を持つ研究者と分かり合えた興奮が、大学人への一歩を後押しした転機だと思います。大学院4年時の最後には学術振興会の支援を受けて、豪州はMacquarie大学医学部神経生物学教室へ留学する機会を頂きました。ある論文を医局の抄読会で紹介したことを機に、多くの縁が繋がり、豪州で唯一摂食嚥下運動の中枢制御に注目する彼らに運命的に出会うことができました。今後もこの縁を大事にしたいです。

今や摂食嚥下リハビリテーションに関連する数多くの報告を目にしますが、病態理解の根底には、基礎的なメカニズムの理解が重要であることを痛感します。臨床および基礎研究のデータを積み上げていき、歯科という立場から摂食嚥下リハビリテーション学分野のさらなる発展に貢献したいです。今後ともご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



豪州タロンガ動物園にて



## 歯周診断・再建学分野

田村 光

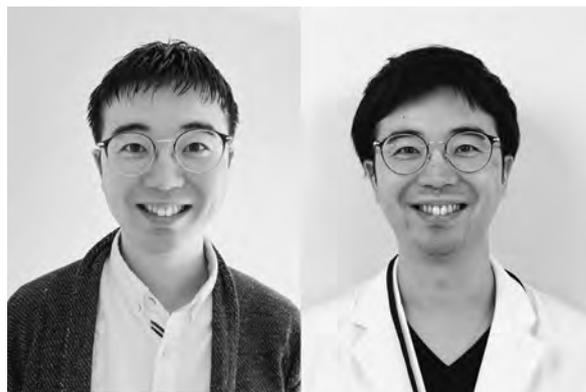
2025年4月1日付でスイングバイ・プログラム助教を拝命しました、歯周診断・再建学分野の田村光と申します。この度、素顔拝見を書く機会をいただきました。今日は2025年12月28日、私の34回目の誕生日に筆を執り、皆さまに自己紹介をさせていただくとともに自身の半生を振り返ってみたいと思います。

新潟県長岡市で、17期卒の父田村宏とその患者であった母から生を受けました。軽い嚥下障害があったためなのか、よくムセよく戻す子供だったようですが、無事にすくすく成長し、中学では野球部に、高校では音楽部合唱班に、大学では弓道部に所属していました。昔から、「何をするかより誰とするか」を優先して選ぶ性格であったため、どの時代も周りには好きな人たちがたくさんいたように思います。

新潟大学歯学部を卒業後、研修医Bコースから歯周診断・再建学分野へと進み、大学院の研究では、微生物感染症学分野にて寺尾豊教授や前川知樹先生にご指導をいただきました。歯周病における炎症や骨吸収を制御する新たな方法を探索し、有益な効果を持つ米ペプチドの発見や、今や全国区になりつつあるDEL-1の研究にも携わらせていただくことができました。その後、多部田康一教授にご紹介いただきアメリカ東海岸のボストンにあるタフツ大学医学部免疫学分野のPoltorakラボに3年間留学をしました。留学先では、サイトカインストームなどの急性炎症を制御する新規因子の同定と、その分子メカニズムの解明を目的として、免疫遺伝学的手法を用いた研究を行いました。アメリカでの仕事や生活では、日本とは違った多くのことを学び、感じることができました。例えば美的感覚の違いを感じました。どちらも同じような写真を見せて髪を切ってもらいましたがアメリカの美容室（写真左側）と帰国後日本の美容室（写真右側）では、仕上がりにかなり違いがありました。また、ラボの同僚はボス夫婦を除いてアメリカ人でしたが、彼らは仕事に臨むときの身体やメンタルのコンディションをととても大事に

していて、いつも元気に働いていたことが印象的  
でした（ロシア人のボスはジャパニーズ根性と忍  
耐を評価してくれました）。円安と物価高が進ん  
だ影響で、生活には苦労した面もありましたが、  
妻や両親の支えと助けもあって3年間楽しく過ご  
すことができました。

若輩ものではありますが、今後研究・臨床・教  
育いずれにおいても学び成長して、本学の発展に  
貢献できるよう精一杯精進してまいりますので、  
ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたしま  
す。



左アメリカ美容室後筆者、右日本美容室後筆者

